



JAPAN URBAN DESIGN
INSTITUTE

都市環境デザイン会議

東京都渋谷区広尾1-10-4
越山LKビル内 〒150

TELEPHONE 03-5420-5995

FACSIMILE 03-5420-5996

JUDI NEWS

022 FEBRUARY 20.
1995

発行者
都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

● 全国ブロック幹事会報告..... 1	● 阪神、淡路大震災について.....10
代表幹事会報告（と意見）..... 1	● 神戸から.....11
委員会活動報告..... 2	● 神戸へのメッセージ.....11
ブロック活動報告..... 3	
● 小樽デザイン・フォーラム..... 6	
小樽市内“歴まち”ウォッチング..... 6	
小樽デザイン・フォーラム報告..... 7	

阪神大震災心からお見舞い申し上げます。

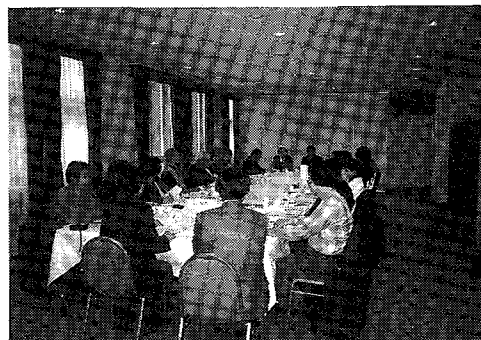
多くの方々が犠牲になられ、家や仕事を失われ、明日に大きな不安を抱えながらの日々のご苦労、ご心労は想像に余りあるものであり、心からお悔み申しあげます。

阪神の会員の皆さんは、幸い、本人、家族ともご無事でしたが、自宅や事務所に大きな被害が出た方もおられます。個人的なご事情を抱えつつ、地域のことや都市再建に向けて奔走しておられる諸兄には、ただ身体に気をつけて頑張って下さいとしかいいようはありませんが、このような災禍がわが身、わが地域にいつふりかかってもし思議でないということを考えれば、決して他人事ではすみません。都市環境デザイン会議としても、われわれ自身の問題としてこれを考え、行動をとりたいと考えます。

全国ブロック幹事会報告

全国ブロック幹事会小樽で開かる

1994年度全国ブロック幹事会が本年2月5日（日）、特別景観形成地区内の市指定歴史的建造物を改装した小樽グランドホテルで開かれた。代表幹事、各委員会委員長、ブロック幹事、事務局（中村）、合わせて24名の出席をみた。前日の小樽見学会、地元会員、市民や地元企業も交えたフォーラム、懇親会で夜遅くまで交流したにもかかわらず、朝早くから昼過ぎまで代表幹事（総務担当）の倉田直道の司会で各種の報告や意見交換がなされた。以下にその報告を行う。



代表幹事会報告（と意見）

代表幹事（総務担当） 倉田直道、加藤源、大塚守康

1. 全国ブロック幹事会の開催地・時期について
次年度以降の全国ブロック幹事会の開催地と開催時期について、地方で行うことはさまざまな意義をもつが、予算措置や準備等で負担も大きい。（隔年地方開催ということもあるのではないかとという代表幹事会提案にたいし、是非地方ブロックで、という意見が強かった。今回は四国又は四国と中国の共催という方向で検討をすることになった。）財政的には今後代表幹事会で検討を重ねる。
2. 会員増強、自治体職員等の入会規定について
自治体職員のJUDIへの入会を用意するための入会金免除などを検討してはどうかとの発案である。（おおむねの意見は、あくまでも個人参加を原則としたいし、これまでも特段の支障はないとのことであった。しばらくは現在のまま運営を行う。）なお、入会申込書の管理については、原則として事務局を通して行うことが望ましいが、

代表幹事及びブロック幹事が入会申込書を多少ストックして会員の便宜を図り、会員増強の機会を逃さないようにする。

3. 会員名簿改訂版の作成について

ストックの名簿が少なくなってきたのでできるだけ早く会員名簿作成に着手し、総会までに印刷したい。については異動等に関し、できるだけ速やかに事務局まで連絡をお願いする。

4. 自治体などからの会員紹介依頼について

これまで二、三の自治体から特定なプロジェクトの受託先としての会員紹介依頼があったが、原則的に特定の会員を紹介することは行わないことにしているので、この場を借りて再確認をしたい。

5. JUDIの財政状況

中間的収支報告（略）の通り、財政状況は楽でなく、理解と協力を要請する。

委員会活動報告

■広報・出版委員会報告(中間)

委員長 土田旭

1. JUDIニュース

(1)JUDIニュースの発刊にあたって、その体制強化を図り、広報委員会の下にJUDIニュース編集委員会(12名)を設けた。広報委員+新委員の2名で各号を担当する。また、地方ブロックニュース等に継続して情報収集ができるよう担当委員(作山)を置いた。

(2)JUDIニュースの発行は偶数月20日発行になっているが、偶数月は年末(印刷所の繁忙期)、4月(事務所業務の繁忙期)、8月(夏期休暇、盆休み)等、多少不都合な点があり、できれば奇数月発行としたい。そのため、全国幹事会のニュースを中心に2月20日号として臨時的に発行し、以降、1ヵ月ずらすこととする。

2. イヤーブック出版

(1)都市環境デザイン年鑑(といっても2年に一度

を予定)編集のため同編集委員会を設けた。(編集委員長 鳴海邦碩以下委員10名)すでに数回委員会をもち、おおよその骨格はでき上っている。ニュースでも各会員、地方ブロックに投稿・寄稿を依頼している。

(2)イヤーブックという性格上、アップ・トゥ・デート、カレンシィな話題を中心に論評し、数号積み重ねる中で、時代性が浮き彫りにされることを考えたい。

3. その他

「広報」・「出版」という名称からイメージされる即戦的あるいは社会的な、コンタクトないし出版企画の横の連絡はあまりとれていない。これは委員会開催を増やすことが困難ということもあり、これまで通り代表幹事会で対応してもらえれば有難い。

■研究・研修委員会活動報告(中間)

代表幹事(研究研修委員会担当) 岸井隆幸

研修・研究委員会(篠原委員長)では、今年度以下の3点について実施を予定しており、現在、それぞれの担当者が関係者と協議を進めている状況にある。

1. 会員向けの研究研修(担当:篠原委員長)

・大谷幸夫氏、楨文彦氏をゲストに迎えて行ってきた都市環境デザインセミナーを引き続いて実施する。

・今年度は一応、建築家を迎えて行うシリーズの最後と考え、ゲストとしては安藤忠雄氏あるいは宮脇檀氏とする方向で現在交渉中。

・セミナー実施は春(あるいは秋)、東京に於ての予定。

・なお、本セミナーについては従来JUDI会員の参加が少ない傾向にある。会員自身の研鑽のために積極的に参加されるよう期待する。

2. 自治体職員向け研究研修(担当:岸井委員)

・都市環境デザイン全体の質を高めるためには、発注者である自治体職員の方々に、特に深い理解を求めることが必要である。

・近年、講話やスライドによる研修の機会は増加しているが、具体的に手を動かして体験してもらう研修は数少ない。そこで、2泊3日程度の実技演習を軸にした研修を企画する。

・JUDIが任意団体であること、研修場所、内容を考えるとそこそこの費用が必要になること等

を勘案すれば、行政部局に近い公益団体と協力して進めることが現実的であるので、現在(財)都市づくりパブリックデザインセンターとの協調で実現すべく協議を進めている。

・なお、具体的な研修内容、募集方法、講師の人选等については検討中であるが、5~7月、東京での実施をめざしている。現在(財)都市づくりパブリックデザインセンターから都道府県に照会を行っている。(7月12、13、14日が候補になっている模様)

3. 学生向けの研究研修(担当:浦口委員)

・今後の都市環境デザインの担い手は若者層であるが、現在の教育体制は縦割の傾向が強く必ずしも都市環境デザインの全体像を的確に伝えるものとはなっていない。そこで、横断的な会員を有するJUDIが直接、各分野の情報を伝えることを企画する。

・現在、早稲田大学後藤先生の協力を得て、早稲田大学を会場として広く各大学(対象は土木、建築、造園、造形等の各学科)に呼びかけることを検討している。

・開催時期は一般的な就職活動にもらんで5~6月とし具体的には「都市環境デザインの実際(仮題)」といった内容でシンポジウム等を開催すること等が検討されている。

■国際委員会報告(中間)

代表幹事(国際委員会担当) 窪田陽一

1. これまでの委員会

第1回:1994年10月11日(火)

第2回:1994年11月16日(火)

2. 委員会

長島孝一(委員長/AUR)、加藤源、倉田直道、西村幸夫、卯月盛夫、南條洋雄、佐々木葉二、井口勝文、中井検裕、谷明彦、望月真一、河合由寛、三谷泰彦、窪田陽一(担当幹事)

3. 活動計画

(1)JUDI国際セミナー開催(担当:谷明彦)

第1回:1995年2月11日(土)13時~17時

テーマ:日本在住の外国人プロフェッショナル

(7人)によるまちづくり討論会

会場:国際文化会館(六本木)

(2)JUDIニュースに国際委員会からの報告ページを設ける。当面(2、3回)三谷委員によるアメリカの都市環境デザイン紹介記事。国際情報の提供。

(3)英文版海外の都市環境デザインガイドブックの構想(他委員会との調整を行う)

■事業委員会報告 (中間)

委員長 西沢健

事業委員会メンバー／南條／西沢／吉田／土田／岡村／佐々木／長谷／中野／藤井／松井／松谷

1. 事業委員会事業

(1)モニターメッセ事業

担当：西沢・中野／山口氏（園株式会社）

期日：総会と同日で検討中。

詳細：場所、内容（テーマ）、運営共に検討中

(2)出版事業

担当：佐々木・藤井・松井

『都市環境デザインガイドブック』について

2. 受託協力

(1)助都市づくりパブリックデザインセンター（＝UDC）講師派遣

1994. 12/2 伊藤洋氏（於東京）

12/15 窪田陽一氏（於高崎）

1995. 1/17 岡道也氏（於福岡）

(2)国際パブリックデザインフェアNAGOYA'94 展示協力

担当：林氏・森氏（中部ブロック）

期日：1994. 11/2～5

(3)アーバンインフラ・テクノロジー推進会議

担当：関東ブロック

期日：1995. 1. 27

内容：アーバンクリエイション テーマ・トーク
「景観・環境」八木健一氏／河北秀也／倉田直道／田村美幸氏

3. その他検討事項

(1)対外的シンポジウム等の計画

(2)海外の都市環境デザインガイドブック（仮）作成について－国際委員会（倉田氏）と打合せ、今後の仮題を検討

ブロック活動報告

■北海道ブロック 活動報告(中間)

北海道ブロック幹事 矢島健

●1994年5月28日 シンポジウム

テーマ：彫刻を核とした廃校跡利用の文化施設づくり／美唄市総務部次長（企画広報）藤井英昭氏を招いて

●1994年5月28日 例会

・“アルテピアッツァ美唄”施設見学

・ジャズコンサート

上記施設でのライブを体験／チケット代は各自負担

●1994年9月21日 シンポジウム

テーマ：楽しい体験活動によるまちづくり（まち遊び行動）

北海道工業大学講師 倉原孝氏を招いて

●1994年9月21日 例会

・全国ブロック幹事会の北海道開催について

・上記の実行委員会の設置

●1995年2月4日 小樽 歴まち”デザインフォーラムの開催

●1995年2月5日 北海道ブロック（小樽）にて「全国ブロック幹事会」を開催

■東北ブロック活 動報告(中間)

東北ブロック幹事 山崎洋二

1. 活動報告

1994年度は、春先のブロック会議以来、全員参加の活動は行えなかった。仙台メンバーの数名が、ワークショップ形式で行った仙台市の杜の都デザイン会議のコーディネーターとして参加することとなったため、ブロック活動とは別に当面任意の活動として数名が頻繁に話し合う場をもてた。

今、この会議の成果をふまえて、6月頃までに'95プランニング塾の開催と成果のプリント化を考えている。

1. 活動報告1

・7月28日 例会－都市環境デザインと福祉問題参加22名

・9月17日 見学会－日立駅前地区の都市デザイン事例－参加58名（内非会員35名、懇親会は24名）

・11月28日 例会－造園家の視点、建築家の視点

・12月15日 例会－忘年懇談会

・1月21日 見学会－神奈川の都市環境デザインを考える－真鶴町まちづくり条例の検証－参加28名（懇親会は16名）

・1月27日 「アーバンクリエイション95」テーマトーク1－景観と環境－を主催

2. 活動報告2

・ほぼ毎月運営委員会開催（8回）

・見学会、例会準備、ブロックレター編集その他

3. ブロックレター概要

また、昨年弘前において若手の建築、まちづくり関係者と話し合う場がもて、JUDI会議の意義について一定の認識を得た。各県レベルでのキーマンづくりが必要と思われる。

2. 今後の活動計画

4月 例会開催

・'95プランニング塾の開催の呼びかけ

・仙台プランナーの会との共同の確認

6月 '95プランニング塾

・「杜の都のデザイン…Insight Sendai」杜の都デザイン会議ワークショップから

・9403試作号：広報誌発行のPR／例会報告「大規模開発における都市デザインの新しい試み」

・9404第1号：例会案内「景観問題と町おこし」（鞆の浦の景観問題）／今までの例会活動

・9406第2号：例会案内「都市環境デザインと福祉問題」（障害者と健全者がともに共用できる条件とは）／例会報告「景観問題と町おこし」／見学会案内「日立駅前地区の都市デザイン事例」／メンバーズプロフィール配本の案内

・9409第3号：見学会案内「日立駅前地区の都市デザイン事例」／鞆の浦関係記事／例会報告「都市環境デザインと福祉問題」／運営委員会記録／新ブロック幹事挨拶

・9411第4号：例会案内「造園家の視点、建築家の視点」（シトロエン公園に於けるコラボレーション）／見学会報告「日立駅前地区の都市デザイ

ン事例」／見学会案内「神奈川の都市デザインを考えるー真鶴町まちづくり条例の検証」／運営委員会記録

・第5号94.12：見学会案内「神奈川の都市デザインを考えるー真鶴町まちづくり条例の検証」
(藤沢市都市景観条例との対比)／アーバンクリエーション95案内／「瀬の浦その後」／例会報告「造園家の視点、建築家の視点」(シトロエン公園に於けるコラボレーション)／例会予告「デザイン管理について」

■北陸ブロック活動報告(中間)

北陸ブロック幹事 水野一郎

□ブロック会員数20名

□都市環境デザイン会議 in 福井

日時:1994年11月18日(金)13:30~17:00

会場:福井商工会議所ビル

内容:第1部 基調講演『金沢における景観からの町づくり』/第2部 フォーラム『地域資源を活用した町づくりのあり方』

事例発表及びパネルディスカッション

出席数:(ブロック会員)15名(一般参加者)85名

*翌19日(土)福井市見学会(おさごえ民家園他)会議内容の詳細は、JUDIニュース21号

・課題:ブロックレターの関東ブロック外会員及び非会員への配布

4. 継続テーマ

1)福祉問題2)歴史的環境3)デザイン管理

5. デザイン班

1)タウン&グランド・デザイン2)パブリック・デザイン3)ランドスケープ・デザイン4)シビック・デザイン

6. メンバーズプロフィールの件

にて報告

□北陸ブロック総会

日時:1994年6月4日(金)16:00~18:00

会場:金沢郵便貯金会館

議題:1993年度事業報告、会計報告、1994年度事業計画、予算計画、新旧会員の自己紹介、近況報告など

出席数:17名

□今後の予定

・会員各自の研究報告の報告会(5月頃)

・都市環境デザイン会議 in 新潟(11月頃)

■中部ブロック活動報告(中間)

中部ブロック幹事 玉木伸秀

1. 「国際パブリックデザインフェアNAGOYA'94」へのパネル出席

平成6年11月2日~11月5日の4日間にわたり、名古屋吹上ホールにて、第4回「国際パブリックデザインフェアNAGOYA'94」が「世界の街かどーあゆみの新風景」をテーマに開催されました。このフェアは公共空間(パブリックデザインスペース)のデザインの向上を目的に昭和63年に第1回を開催して以来、隔年で行われているものです。その中で「都市環境デザイン会議パネルコーナー」として、中部ブロックから下記のメンバーがパネル出席。「都市環境デザイン会議」の主旨や活動などもパネルで紹介し、多くの来場者に会の認知を高め、会員の最近の作品などを紹介できたことから大変意義深い参加であったと思います。

■パネル出席者

・「モノづくりの心と技の伝承ー産業技術記念館」

(株)竹中工務店 小川清一・集山一広

・「ダイナミックな新風景ー小里川ダム」(株)景観工学研究所 玉木伸秀

・「十勝の未来に翔ける橋ー十勝大橋ー」(株)景観工学研究所 山口雅子

・「時空を越えて...Holonical Design」日本屋外造形(株) 大村正幸

・「ーあゆみの新風景をつくるー新瑞橋モニュメント計画」(株)都市デザイン研究所 小島篤

・「東海道の歴史と伝統産業の融合ー駿府・匠宿基本計画」(株)地域デザイン研究所 望月誠一郎

・「新都市空間の舗装床タイルー中央大橋ー」

(株)INAX・新興窯業(株) 松原義明

2. 名港三大橋会場見学会 '94.11/2名古屋港

日本道路公団が建設を進めている伊勢湾岸道路の名港三大橋を日本道路公団のご厚意により高速船にて見学。途中、金城埠頭にある「夢渡り館」にて模型やVTR等を見ながら説明を受けました。名港三大橋は世界的にも最大級の3つの斜張橋が連なる道路として注目されている道路です。特に中央大橋は中央径間が590mあり、斜張橋としては世界で4番目の規模となります。橋の塗装は、東大橋が空や海をイメージした青、中央大橋は大白鳥が羽を広げたようなイメージの白、西大橋は現在共用中の1期分の色をそのまま生かして赤となります。建設中の橋を間近にみる機会は滅多にないことから、大変意義深い見学会となりました。

3. 中部ブロック例会'94.11/26 船上見学会の後、名古屋港ポートビルにて開催

自己紹介と近況報告に続き、今後の活動について下記のような意見が出されました。

・著名な先生によるシンポジウムではなく、一般生活者から見た都市づくりというものを意見としてまとめ、我々が公共へと発信していくようなフォーラムを開きたい。

・JUDIには、様々な職種・分野の人達が集まっているので、分科会を作って興味があるテーマについて議論を行うなど、突っ込んだ活動ができるようにしていったらどうか。等。

この話し合いを受けて、まず今年の春頃に中部ブロック主催のフォーラムを開催することに決定。準備部隊を編成し、内容について具体的にすすめていくことになりました。

■関西ブロック活動報告（中間）

関西ブロック幹事 江川直樹

1. 関西ブロック会員 76名
2. 体制
ブロック幹事－運営委員長－運営委員（セミナー9名、フォーラム11名）監査役、ブロック事務局、会員連絡（FAX）事務局＋本部系役員（12名）
3. 都市環境デザインセミナーの開催
全10回（総出席者343名（会員外164名））
「A・A諸国建築家のみた日本の都市空間－日本から何が学べるか？」／「京都桂坂の住空間のデザイン」／「パブリック・アート再点検」／「播磨科学公園都市の環境デザイン」／「今、奈良が危ない－奈良町の現状と未来」／「公的開発におけるデザイナーの参加とプロセス」／「神戸からのランドスケープ報告」／「プロジェクト点検－西宮名塩ニュータウン」／「住民参加のまちづくりと都市計画」／「田園地域における都市開発のヨーロッパ的作法」
4. 第3回都市環境デザインフォーラム・関西の開催
テーマ：「土木と環境デザイナーその理念と実践的方法論」
第1日レクチャー：けいはんなプラザ住友ホール
参加者約550名

■中国ブロック活動報告（中間）

中国ブロック幹事 金谷啓紀

1. これまでの活動
1994年度第1回例会と懇親会を11月5日（土）に岡山で行った。出席者は松波、寺本、五百田、長沼、金谷の5名。この時点で新入会員の秋元、宮迫は都合で出席できなかった。この会において、今年度の活動目標を以下のように定めた。
(1)各県別に市や県の優秀建築物や景観賞の事例を設立当初からすべて集め、比較検討する。次年度には巡回展を企画する。
(2)中国ブロックでは都市環境デザインについては言うまでもないが、田舎のデザイン（ルーラルデザイン）についても考えなければならないのではないかと提案があった。
(3)四国や九州と合同ブロック会議を開催しようという提案があった。
(4)関西ブロックが活発なのでこちらから参加する、あるいは来てもらうという提案があった。
2. 今後の活動計画

■四国ブロック活動報告（中間）

四国ブロック幹事 林茂樹

1. ブロック活動
(1)運営会議の開催
本年2月末から3月頃に高知市にて開催予定
(2)機関誌の発行
「JUDI NEWS 四国」VOL. 3を1月20日に発行
(3)シンポジウムの開催
『ベイスайдトーク』の開催
四国ブロック事業として去る8月24日にシンポジウム『ベイスайдトーク』を徳島県小松島市総合コミュニティセンターで地元のウォールアート実行委員会と共催で開催しました。
徳島県小松島市は港町として栄えていたが、今のはかつての活気はなく、ここ20年ほど街の風景

- 第2日ディベート：ならまちセンター他
参加者100名 後援16団体、協賛16社／フォーラム当日、テキスト「土木デザイン・キーワード集」発行／テキスト希望の方は関西ブロック事務局までFAXで／06-364-2605 ¥2000
5. 出版
1992、1993年のセミナーの内容を中心に再構成したものを出版
「都市環境デザイナー13人が語る理論と実践」
鳴海邦碩編、都市環境デザイン会議関西ブロック著 発行 学芸出版社
 6. 1995年度活動計画
(1)体制
運営委員長の改選、運営委員の変更（セミナー13名、フォーラム12名）
(2)都市環境デザインセミナーの開催
全10回を予定。内容はセミナー委員会メンバーにて検討。
(3)第4回都市環境デザインフォーラム・関西の開催
テーマ：（案）「まちのアイデンティティと都市環境デザイン」／内容はフォーラム委員会メンバーにて検討

- 3月例会＋親睦会
今年度の活動目標である、各県あるいは都市における景観賞や優秀建築物の年度別の事例の収集と、いい田舎をみつけ、ミニシンポジウムの開催準備、開催地の決定、会員増強策の検討、および会員相互の親睦を図る。
四国、九州との合同ブロック会議の開催を検討する。
4月例会＋ミニシンポジウム
いい田舎において合同ブロック会議の開催を検討する。
3. その他
第1回例会後、杵村君が新しく入会した。これで中国ブロック5県総て会員がそろったので、今後の活動に幅がでてくれると思われる。2月以降、今年度あと二人を目標に、会員各自が会員増強の呼び掛けを各県にておこなう。

はほとんど変わらず時代の進歩から取り残されています。連絡船の乗船客や近郊からの買物客で賑わった商店街も今は店を閉めたシャッター街と化し、商業エリアは国道バイパス沿いの大型ショッピングセンター周辺に移行しています。
この沈滞した港町に芸術のかおりするそよ風を吹かそうと各種団体や企業、行政などがまちづくりグループ、ウォールアート実行委員会を組織して1989年から取り組んでいるのが港の倉庫群に壁画を描くウォールアート計画です。
公募した絵を倉庫群の壁に描き、完成時にイベントを行っており、日野皓正の台船を使った洋上ジャズコンサートやネーネーズのライブなどを行

ってきている。

今回のシンポジウム「ベイサイドトーク」は、港を中心としたまちづくりを考えようとするもので、四国ブロックが共催したのは、本会関西ブロック会員で壁画を手がけている折田知子さんを講師にお招きし、ウォーターフロントのデザイン戦略について事例もあげながら話をしていただき、参加者で意見を交換しようといったものでした。

ベイサイドトークではこのほか運輸省第三港湾建設局小松島港工事事務所所長福代倫男氏、徳島

県港湾空港整備局長橋間元徳氏、による港の開発や整備計画などに対する二つの講演会と意見交換、女性によるベイエリアのイメージアップ討論会を順次開催しており、これらは小松島のまちづくりについての市民サイドの新しい提言としてまとめる予定にしています。

2. 会員の増強

年度初頭7名から1月末現在14名に増員、会員を二桁にする当初目標を達成。

3. 研究懇談会の開催

会員相互の交流と、当デザイン会議の対外的PRを目的とした研究懇談会を、第2期では福岡市で「博多湾洋上シンポジウム」(1993年5月28日29日に開催/JUDI NEWS No.012で報告)を、第3期は北九州市(門司港地区)で「海峡都市の文化を語り合うシンポジウム」(1994年5月21、22日に開催/JUDI NEWS No.018で報告)を実施してきた。

第4期では、佐賀市で「佐賀の風土と環境デザイン」をテーマに、1995年5月20日、21日の開催に向けて準備を進めている。今後も見学会や懇親会を兼ねて、各県をまわる定期的な催し物として定着させていきたい。

4. その他

1994年11月4日、5日に開催された、関西ブロック主催のフォーラム「土木と環境のデザイン」には、九州ブロックからも数人の参加があった。今後も他のブロックとの交流に積極的に取り組みたい。

九州ブロック活動報告(中間)

九州ブロック幹事 岡道也

1. 会員増強

ブロック活動を充実させる上で引き続き会員増強に努力しているが、会員の多くが福岡県内に集中している(特に福岡市と北九州市)ことから、今後はできるだけ九州全県での会員増を目指していく。

2. 九州ブロックの運営方法に関する検討

九州ブロック会員相互の連絡を密にし、意見交換や交流の機会を増やす方向での運営方法を検討している。特に、会員による研究報告などを含む、定例的な勉強会の実施に関心が高まっており、今後積極的に取り組みたい。

また、「九州市環境デザインガイドマップ」の出版については、実現化に向けて検討中であるが、とりあえず九州ブロック会員から具体的な事例を収集中である。その結果を踏まえて、本部広報・出版委員会とも連絡をとりつつ、情報収集・整理の方針と具体的な作業内容を詰めていく予定である。

小樽 デザイン・フォーラム

小樽市内“歴まちウォッチング”

酒本 宏
HIROSHI SAKEMOTO
和光技研㈱



小樽歴まちデザイン・フォーラム開催に先駆けて、小樽の歴史的建造物、街並みを中心にした見学会＝小樽市内“歴まち”ウォッチングが実施された。

歴まちウォッチングは、北海道内外から約60人が参加、バス2台に分乗し、小雪降る中、午後2時過ぎに小樽駅前を出発した。この日のウォッチングにあたっては、小樽市建築都市部都市デザイン課の仲谷氏、白川氏にガイド役をお願いした。

最初のウォッチングは、日本銀行小樽支店など明治後期から大正にかけて建てられた洋風建築物が数多く残り、小樽市の特別景観形成地区の指定を受けている色内通りを車中から見学した。ルネッサンス風の建築様式などすぐれた様式の建築物が歴史の風格を感じさせ、かつて北のウォール街と呼ばれ、北海道経済をリードした当時を偲ばせていた。

次に、建物全体が一般公開されている国の指定重要文化財、旧日本郵船小樽支店を見学した。この建物は近世ヨーロッパ復興様式の石造りの外観に加え、内部にも海外から集められた建具などが使用されており、当時としては格調高い建築物であったことが感じられた。

ウォッチングの三番目は、今や小樽の重要な観光名所になっている小樽運河を散策した。ここで

は、運河沿いの散策路が道路面に比べて低く、運河沿いに並ぶ石造りの倉庫群などを見ることができないのが残念という感想や、散策路にもっと縦断的变化をつけるべきではないかという意見なども出されていた。その後、倉庫群や倉庫群の裏側にある出抜小路を見学し、再びバスに乗り込んだ。

そして、明治から昭和初期に建てられた低層の商家などが軒をつらねる堺町本通地区や、歴史的建物の保全や再利用が進み文化漂う街並みを形成している入船七叉路、小樽の新しい顔となっている小樽マリーナ、石原裕次郎記念館を車中から見て、午後4時過ぎに小樽市内“歴まち”ウォッチングを終了した。

2時間の強行スケジュールで、部分的ではあったが歴史的街並みを見学して、小樽の魅力に触れることができたのではないかと感じている。

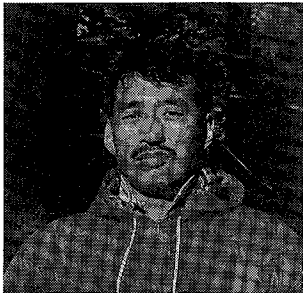


■小樽デザイン・フォーラム報告

柳田 良造

RYOZO YANAGIDA

(株)柳田石塚建築計画事務所



小樽歴街デザインフォーラム

フォーラムは2月4日夕方5時から、観光客でにぎわう堺町通り、有名な石造倉庫を再利用した北一硝子三号館内ホールで行われた。小樽、札幌からJUDI会員以外の参加も多く、100人を越す盛況であった。フォーラムはJUDI北海道ブロック幹事の矢島健氏の司会で、話題提供として仲谷正人氏（小樽市都市デザイン課長）のスライドレクチャー、小樽の都市デザインと街並み保存の現況で始まった。

1. 小樽の都市デザインと歴史を活かしたまちづくりの現況

小樽での歴史を生かしたまちづくりを考える時、その出発点は小樽運河をめぐるまちづくり論争に始まる。運河論争はつらい厳しい論争であった。しかしそのまちづくり論争を通して、市民や行政の意識が変わり、運河の道路計画は昭和5年に一部都市計画変更を行った。運河を中心に周辺的环境整備も行い、現在の姿になった。昭和58年には「小樽市歴史的建造物及び景観地区保存条例」を制定し、その後、バブル経済時の高層マンション問題を契機に、平成4年眺望景観なども対象にした「小樽の歴史と自然を生かしたまちづくり景観条例」に整備発展していった。

小樽の都市景観の特徴は空や山、海からの眺望景観と、歴史的環境の景観に代表される街並みや自然地域などの地区景観に分けられる。小樽運河周辺の歴史的景観は小樽の顔であるが、様々な変貌を経て現在にいたっている景観である。スライドで紹介するように、小樽の歴史的景観での建物のデザイン誘導や広告看板の問題は特徴をもつ事例が数多く見られる。歴史的建物のライトアップや街並みを舞台にしたフェスティバルやウォッチングなど、市民の街並みへの参加イベントも活発化している。

港湾地区での30haの大規模都市開発の取り組みなど新たな都市づくりのテーマもうまれてきている。

〈6つの都市デザインの課題〉

以上のまとめとして小樽での取り組みを通して6つの都市デザインの課題を考えた。

(1)景観を通したまちづくりを進める上での都市計画法など現行の法制度の問題

小樽での都市計画街路の拡幅問題と街並み保存、地区計画と景観条例の地区指定の関係など、景観からのまちづくりを進めていく上では地域毎の個

別課題に対応した柔軟な制度が必要となる。しかし現行の全国一律の法制度の下では難しい面がある。

(2)事業者の街並み保存、デザイン誘導への理解

歴史的建造物の寒さや使い勝手などの機能面、特殊な建物での広告物と街並みの調和などは事業者にとっても切実な問題である。そういう場面で市民の共通の財産としての街並みという観点をどう理解してもらえるか。

(3)景観誘導への行政側の技術

窓口となる担当者レベルでの専門知識、デザイン誘導の客観性を獲得するための景観審議会やアドバイザー制度やCGによる景観シミュレーションの導入など、強制力をもたない景観誘導を進める上では行政側に高い専門的技術が必要となる点。

(4)景観形成での公共事業の役割の再認識

全体のまちづくりをリードする公共事業が都市景観に及ぼす影響を行政側はもっと認識すべき、時には公共事業が歴史的な街を壊す危険性もある。

(5)行政の中での調整

まちづくりを進めていく上での縦割り行政の中での調整をどう進めるか、市、道、国での調整をどう進めるか、行政内部に課題は多い。

(6)市民の理解と協力

まちづくり、景観整備を進める上で市民の理解と協力が欠かせないが、地域の問題を市民レベルで検討できるよう、情報をどう伝えていくのか。また、まち全体のデザインを市民で考える機運をどうつくりあげていけるのか。

2. 小樽の都市環境デザインをめぐる意見交換

その後代表幹事の加藤源氏をコーディネーターに、出席者による小樽の都市環境デザインをめぐる意見交換が行われた。途中7時から懇親会形式になり、小樽新谷市長や千葉北海道まちづくり推進室長の挨拶なども通して、8時半まで熱心に議論が続いた。

〈歴史的環境の保存における北海道都市の特徴ー本州の歴史都市との比較でー〉

コーディネーター 歴史的都市での遺産の活かし方において、小樽のような近代以降の北海道の歴史都市と本州の長い歴史をもつ都市での取り組みにそれぞれどういう特徴、相違点、共通点があるのか、議論してみたい。

水野一郎氏（北陸ブロック：金沢工業大学教授）

金沢の倉庫群の保存問題で小樽との情報交換が



フォーラムの会場となった北一ホール



小樽市都市デザイン課仲谷正人氏のスライドレクチャー

齊藤氏（函館市都市景観課） 函館では、函館山

土田旭氏（都市環境研究所） 小樽に来るのは四度目で、道路ができる前の小樽運河にも来たことがあるが、来る度に観光商業の活性化による変貌ぶりを強く感じる。小樽運河の保存に関しては、かつての運河の風景をそのまま残せば良かったのか、なにを保存しどう再開発すればよかったのか、今も答が出ていない。結果妥協の産物で運河が半分残り、道路ができしたが、土木デザインとしてはあれでよかったのか疑問に思う。特に運河の水辺と遊歩道、町並み、道路との位置関係には別なデザイン（道路を海側の倉庫前に通すような案）が

特別景観形成地区の指定区域図

色内ふ頭 第3ふ頭 第2ふ頭 第1ふ頭 中央ふ頭 三軒橋

至 祝津

小梅並河周辺地区6.8ha

色内大通・緑山手通地区3.8ha

堺町本通地区11.0ha 入船七支路地区3.3ha

緑港陸 中央橋 緑山手橋 入船橋

清水天宮

8

ありえたのではないと思う。

歴史的都市の永遠の課題は現代的価値とどう関係をきり結ぶかである。現代と歴史の対立的調和のあり方は金沢やバリの様な重層的構造をもつ都市で成立しているが、その場合現代的価値を評価する上で市民の美意識に高い水準が要求される。もう一方栄光の時代の歴史的様式に凍結するのも方法論としてはありうる。その場合は栄光の時代の街並みデザイン分析を基に、分かりやすいデザイン・ガイドラインをつくり市民に示す必要がある。小樽の現状では歴史様式にデザイン誘導するときの基準が不明確なように思う。

峰山富美さん（小樽運河を守る二代目会長）

なぜ運河を残そうとしたのか、いつも考えてきた。古いから、珍しいからではない。小樽運河は小樽に住むものにとって掛けがえのないもの、住むものの原点であり、心の拠り所である。小樽の土を踏んだ大正13年から昭和にかけて港には船があふれ、小樽の全盛期であった。運河ははしけでびっしりと埋まり、日夜3000人の人々が働き、周辺には問屋街や金融街（ウォール街）も建ち並び、小樽の心臓部となっていた。

都市計画がこの小樽に住むものの原点をつぶして、道路をつくろうとするのには反対しようと、一主婦から60歳で運動を始めた。やっても、やっても行政に届かない声。反面教師としての行政に対抗するなかでまちづくり論争はどんどんエスカレートしていった。また朽ち果て、ヘドロのたまった運河に否定的な市民の声。そのなかで10年近く頑張り続けたが、結果は道路ができ運河の巾は半分になり、生活感のない水辺が生まれた。

つらい結果になったが、しかし運河が半分失われることで、変わらなかった行政、市民の価値観が10年たって変わった。行政、市民の意識が変わったということが運動をやった大きな喜び。まちづくりは、市民はどんなまちを望むのか、市民はどんなまちにしたいのか、市民が強い意識をも

つことが大切だと思う。

今の小樽は保存運動で考えていたまちづくりとはひと味ちがっている。観光業者が入ってきて、小樽らしさが失われるのではないかと心配する。運河はこのままでいいのか、という疑問もわく。500万の観光客が小樽に来て、何を見てどう考えているのか心配だ。第1次の運河問題はひとつの終わりを告げたが、第2次の運河を中心としたまちづくりをもう一度はじめたい。なぜまちづくりをするのか、それは市民にとってどういうことなのか、考えたい。地域に生きるということとはまちの文化、歴史にどうかかわって生きていくということだと思う。若者にどうまちにかかわって生きていけるかを伝えたい。

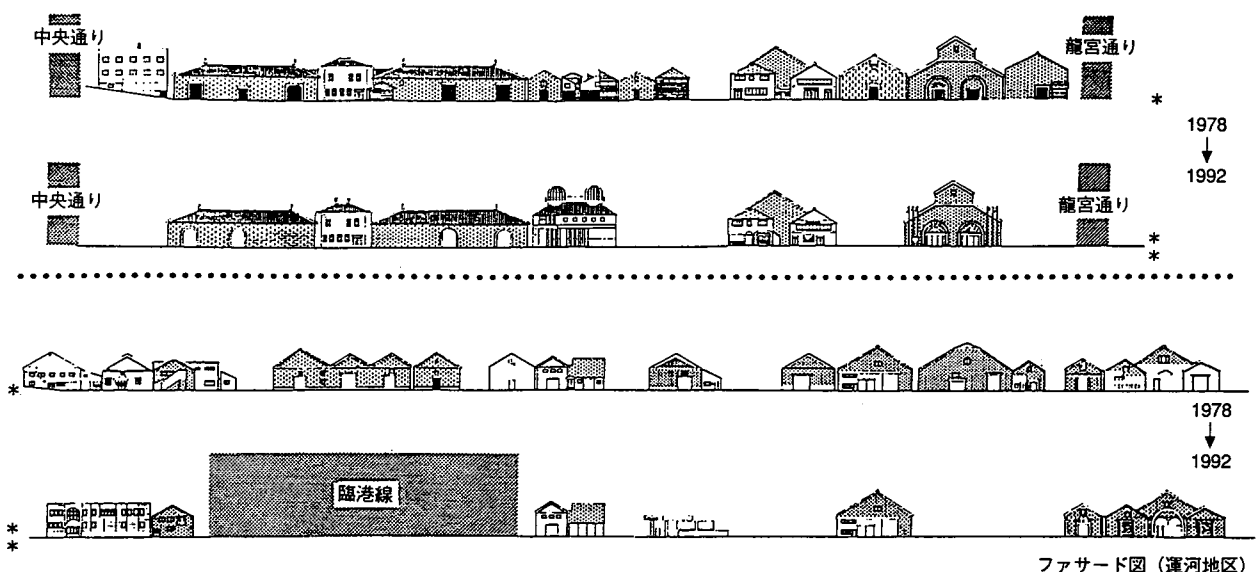
コーディネーター 峰山さんの話に圧倒された。小樽の運河問題、運河を取り巻く議論はわが国の都市計画、まちづくりのパラダイム関心の対象領域一を大きく変えていった原点のひとつであったと思う。

岸井隆幸氏（日本大学講師） 運河論争当時、建設省にいたが直接かかわっていたわけではない。

一般論として歴史的なまちは優れたストックをもつが、長く衰退していたところが多い。街並み保存には地区の活性化が課題になる。そのため観光、交流をテーマにして人が集まってきて、金が落ちる仕組みをつくる地域経済の活性化の戦略が発想された。その手段として交流のインフラストラクチャーづくり、たとえば道路づくりなどが方法化された。運河の4車線道路もそういう交流のインフラストラクチャーとして考えられたものだと思う。お金をかけると一層の経済効果が予想される場合、道路づくりにも上積みして予算がかけられる。運河の道路の場合も工事費はペラボーに金がかかったが、500万人もの観光客が来ているので十分投資効果はあったと思う。

小樽の歴史地区の18Mへの道路拡幅の問題は、インフラストラクチャーの問題ではなく歩道をど

運河地区景観の変化(1978-1992)



(出所) 明円孝一 (1992:34)

図版：北大大学院明円孝一らによる調査1992

う整備するかというテーマだと思う。この場合は都市計画も融通がきく問題だ。歩道整備は観光客のためだけでなく、生活者にとっても重要だ。小樽は観光だけでなく、生活者にとってもいいまちづくりをめざしてほしい。そのためには一気に仕上げないで、ゆっくりと時間をかけてつくっていくことや、建築家ではない一級建築士や土木エンジニアでない土木行政実務家など、まちづくりにかかわる一般の技術者のレベルでも、まちづくりへの共通の理解や情報交換の場をつくっていくことが大切だと思う。

3. おわりに

小樽運河問題の20年間は70年代から90年代にかけての20年間である。その時代日本社会のなかで何が変わって、北海道はどうであったか。戦後から現代へ移り変わるそのなか、小樽というまちは忘れられた歴史をたぐりよせることで、一気に時代をかけたのぼってきた。「開発」が叫ばれた70年代、皮肉なことに小樽は全く変わらないまちであった。「保存」がスローガンとなった80年代から90年代、まちとその風景の変貌は激しい。「保存」をテーマにした開発が小樽運河やその周辺地区で、早いスピードで進んでいる。こ

ういう光景を前にすると70年代盛んに語られた「保存と開発の対立」は一体なにであったのかとも思う。

われわれは、日本の都市環境デザインについて、もっともっと語りあうべきであり、もっと議論すべきである。われわれの語り口はあまりに断片的ではないであろうか。いま時代との関わりの中なかで社会、経済、生活、景観、計画の総体をとらえる評論としての都市環境デザインが求められているように思う。

とまれ今回の小樽歴街フォーラムは限られた時間のなかではあったが、建築学会、土木学会、都市計画学会などとは違う、やはり都市+環境+デザイン+会議の議論とはこういうものかと思う点はいくつか感じられた。街並み保存と土木デザインを一体に考える視点、都市空間の重層性と特定の時代意匠の対比による都市デザイン論、街並みのデザインガイドライン論、まちづくりにおける市民論議の意味、まちづくりにおける経済投資論、行政を含めたまちづくりの仕組み論など。

今後も都市環境デザイン会議において、新鮮な切り口でのまちづくりのデザイン論議がいろいろな現場で行われることを期待したい。

阪神・淡路大震災について

全国ブロック幹事会における当面の方針

2月5日の全国ブロック幹事会でこの問題について討議され、当面の方針として以下になりました。

・緊急的取組みについては、学会をはじめ多くの機関が動いており、情報や活動が錯綜気味のところも見られるので、本会議としての具体的行動は控える。各自が所属する他の組織を通じてできるかぎり協力する。本会議として必要となる行動は、関西ブロックの判断を尊重する。

・見舞金等については、特定の会員に贈るのは、贈られた方も扱いに困るのではないかと関西ブロック幹事の意見もあり、本会議としては行わない。市民的レベルでの義援金は各方面で活動がなされているので、市民の一員として判断されたい。しかし、被災会員への見舞い、激励は本人にとっても力になると思われるので、是非お願いしたいが、電話をさけ、手紙又はFAXを使用してほしい。

・本会議の活動としては、当面、今回の災害および復興にたいする意見・提言を集め、各方面へ提出するとともに、われわれ自身の今後の活動に活かすことを考えたい。そのため、まず、全国ブロック幹事会のメンバーが文章を寄せる（本号掲載）ことを手始めとして、会員からの意見・提言を募り（次号3月20日号に掲載、3月5日頃までに

事務局まで）、継続的に「災害と都市環境デザイン」について考えていきたい。

阪神間在住在職関西ブロック会員消息（2月5日現在、関西ブロックによる）

- ・江川直樹 本人、家族共に無事。本人はビジネスホテルから通勤、家族は親戚の家。
- ・北村邦夫 無事
- ・後藤祐介 本人、家族、家は無事。会社は倒壊。
- ・安部佳子 無事（本人は実家の方に避難）
- ・狩野忠正 本人、家族無事。家は一部破損。
- ・白井 修 本人、家族、家は無事。会社内がぐやぐや（かたづけ中）
- ・田村博美 無事
- ・大隅曉子 無事
- ・有光友興 無事
- ・松谷春敏 本人、家族共に無事。家は室内、家具等破損。
- ・平井康幸 本人、家族共に無事。自宅、会社は軽い損傷。
- ・三宅祥介 本人、家族、家も無事。
- ・松田一二 本人、家族無事。現在ガス通らず。
- ・安田丑作 本人、家族無事。家は家具類の転倒のみ、現在ガス、水道通らず。
- ・丸茂弘幸 本人、家族無事。自宅は食器類の損傷程度。ガスは現在不通。大学の方も本類が倒れた程度。

まちづくり株式会社コー・プラン代表 小林郁雄

950120

●震災直後の神戸から

突然、寝ていたからだか上にもちあがってドスンと落ちた。

はね起きてすわり込む。まもなく激しく左右にゆれた。本を入れた箱がはね飛び、食器の箱がどさっと倒れガチャガチャと陶器・ガラスをかきまぜる音がする。すべては夜明け前の闇の中である。

20秒後（と後で知った）ベランダへ出て、真黒な神戸の街を見た。目の下に広がる灘区で2〜3か所、三宮方面、東灘方面でも1〜2か所、火の手があがっている他は、まっくらである。六甲アイランド、ポートアイランド、三宮、新神戸などの超高層ビルは無事建っているようだ。それぞれの屋上で点滅する赤い灯だけが光っている。こうして1月17日の夜明けを迎え、これから20年は続くと思われる震災都市神戸の新しい歴史が始まろうとしている。

1月19日、倒壊した事務所（まちづくり株式会社コー・プラン）のとりあえずの処理もそのままに、フィールドである神戸都心から西部の戦前長屋市街地を、何はともあれバイクで行った。

三宮のおぞましい程のビルの破壊は多くの映像が全世界へ流されているとおりで、裏側のビルも含めて、最近の建物を除いて、語る言葉はない。旧居留地や栄町通の多くのいとおしい建築達、なつかしい風景はもうない。

15番館のガレキ、第一勧銀の巨大な門柱の痕跡を残す石の山の前で5分程ボーッとしていた。そして、上沢通、松本通での焼土を前に息をのむ。これが地獄というものなのか、第2次大戦の焼跡の映画セットを見ているのではないか。焦げるにおいとブスブスとくすぶる音がリアルすぎるが。上沢の区画整理の住民協議会長が半倒壊の自宅の前で、ススミれた顔で元気にしていた。

ひょっとしたらこれは全て夢ではないかと時々思ってしまう。こんなことがあろうはずはないのだからと。確かなものは今はなにもない。

950126

●震災一週間たった神戸から

街は変に明るい。人々の顔にもこやかだ。怒っている人はまれだ。悲しい表情（どちらかというが無表情というほうが正しいが）を隠すことはさすがにできない。こんな時、関西弁は便利というか、何かと力強く心を安ませる。そうでんなあ。全市民、全市街地、すべてのものが等しく壊滅することは、なぜか同志としての連帯の中で世の中が見える。不満は不平等からおこることがよく解った。

1月20日神戸市から電話が入り、（もちろん自宅へ）、復興計画への参加がはじまり、震災ウオッチングと妙にのんびりとした3日間が終り、時間がなくなった。

復興計画に対する都市計画の友人達、仲間の事務所のネットワークやとりくみ、「震災復興市民プログラム NPO」の組織化、寄金募集の依頼（東京・林さんなど）等々、お知らせしたいことが山ほどあるが、今はその時間がない。復旧のための活動（肉体労働である）と復興への思考が平行して必要となっている。リアルタイムで計画と実行がすすんでいる。

最後に最大の悔みをも一つ。神戸に地震なぞくるわけがないと思い込んでいた。地質や活断層の知識はあったが、それは文献の上のことで、神戸の私の行動規範に大火や大水害への備えはあっても大地震はなかった。よりによってなぜ神戸なのかという思いである。

私達の愛した事務所は倒壊したが、別棟で何とか動いている。資料はガレキの下に今もあるが、仕事は始まっている。その最大の理由は全所員が（といっても私を含めて4人だが）事務所の徒歩圏に住人である（ありがたいことに全員、住宅も含めて無事）ことである。歩いて事務所へ出て、帰ることができる。今の神戸では最も重要な条件といえる。この交通途絶したブラックホールのような神戸市街地では今の一週間の活動できる時間が重要であるからだ。

神戸へのメッセージ

関西ブロック事務局(株)ヘッズ大塚守康

関西ブロックから被災状況の報告

強弱の差こそあれ、関西ブロック会員のほとんどは事務所、自宅において物が散乱し、破損するなどの被害を受けました。しかし、幸いにも会員及び家族、社員において亡くなられた方も大怪我をされた方もおられません。しかし、(株)コープランの小林郁雄さん、(株)ジーユー計画研究所の後藤祐介さんは、事務所が倒壊するなど特に酷い被害を受けられました。(株)ES計画室の大山雄三さんの神戸事務所は元町の駅前にあってビルの倒壊は免れたものの室内の破損が酷いようです。また、関係のある神戸大学の重村力先生が足を骨折されました。

以上の方々とはともかく、なにかと後遺症はある

ものの、関西ブロックの会員一同、元気に活動を開始しておりますので御安心下さい。

神戸へのメッセージ

あれだけの痛手を受けた神戸に対し大阪は、以前にも増して美しい神戸を再建するために共に頑張ろうとしか言いようがない。大阪ができないことを今の神戸ならやれる。そのためには困難ではあるが、まずは仮設対応と規制を徹底してほしい。本格的な再建計画はその上で時間をかけてじっくりと。ただでさえ土地のない神戸にとって湾岸部を占める重工業地帯は、それ自身が転身を考えている時、最大の可能性を秘めた土地となると思われるのだが。

㈱近田玲子デザイン事務所 近田玲子

小林郁雄様

心配していましたが、無事で何よりでした。2月4日にJUDIの小樽フォーラムがありました。

元気づけに、懇親会で挨拶された小樽運河を守会の会長の話をお伝えしましょう。—小樽市が運河を埋め立てて道路をつくろうという計画を知ったのは今から20年前、60歳の時でした。へどろの浮いたどぶ川のような運河を残そうなんてキチガイだと言う人もいました。私は、この運河にびっしりと舳が停泊していた、小樽が一番輝いていた時を知っています。「北のウォール街」も総てこの運河からもたらされた富から作られました。小樽の歴史の原点はこの運河にあるのです。—20年の運動の重みに圧倒されなした。それにも増して、生活の記憶、風景の記憶がどんなに大きな力を与えるか、肝に銘じて知りました。小林さんの愛した神戸はどんな姿をしていたのでしょうか。おしゃれな神戸、美味しい神戸、気取った神戸、何よりも、美しい海と山に抱かれた神戸をもう一度蘇らせて下さい。

岸井隆幸

〈海に輝く街・山に映える街・美しき人の街〉

神戸は我が故郷である。

通学の車窓には穏やかな海が広がり、グランドからは夕日に照らされた六甲の山々が望まれた。三宮から丸善の横を抜けて元町のコーヒー屋へ、月見山から須磨の離宮に入れば、静寂の中、彫刻が水に揺らぎきらきらとまばゆい光を四方に放っていた。

神戸はいつもさわやかな汐風に吹かれている、清らかな水と緑に抱かれている、そして穏やかでたおやかな人達に育てられている。

100年前には裸の六甲を緑に変えたやないか、50年前には空襲の焼け跡から這い上がったやないか、我々かて負けてたまるか！

今に見とれよ、負けるな神戸！

東北ブロック幹事 山崎洋二

懐かし神戸の人たちへ

学生時代を神戸で過ごした自分としては、今回の神戸の崩壊は思い出を写したままのネガをなくしてしまったような思いです。今は遠ざかってしまった神戸ですが、灘のボロアパートやガード下の本屋、三宮界隈の混雑、夜明けに迷い込んでしまったオカマバーなどは、てっきりまたいつか会えるものだと思いきっていた。貧乏ぐらしの自分たちが歩き回ったところが余計に失われていったのは皮肉な結果だった。

軽々しく、自分が今何が出来るともいえませんが、懐かしい街の崩壊を目の前にした今、住み良いといわれた街の何が失われたのか、改めて評価しておく必要があるように思います。防災に熱中するあまり、神戸の街の失ってしまった財産を本当に見失わないようにと思います。仙台の新しい

く創り変えられた街並を見ながら、神戸の街ならではの味のある復活を願わずにはいられません。

現代計画研究所 大阪事務所 江川直樹

今回の震災は、マンションローン問題をきっかけとして、積層集住空間の在り方に関する問題を考える契機になるだろう。特に、集合住宅における環境骨格としてのスケルトンの社会財化とインフィルとしての私的空間の扱いについて、積極的な議論が進められれば、新たな都市空間、都市居住の創出への期待がより本質的な視点でもてると期待する。……芦屋より

代表幹事 成瀬恵宏 ㈱都市設計工房

将来を見据えたグランドデザインの下に今まで以上に“素晴らしい街”の復興を……！！

今回の阪神大震災で大勢の命を落とされた方々の御冥福をお祈りするとともに、本会会員の中にも怪我をされたり財産を失われたり、甚大な被害を受けた人がおられることを聞き、深くお見舞い申し上げる次第です。

我が国を代表する“魅力的な街”阪神地域が一瞬にして崩壊してしまったことは、私たち都市環境デザインに携わる者にとっても、全く看過できない問題です。皆で力を合わせて、今まで以上に“素晴らしい都市環境を有する街”そして“永く住み続けられる街”として、一刻も早く復興されることを願って止みません。

自らも大きく被災を受けながら、こうした阪神地域の復興計画の立案に厳しい場面で奔走をされている本会会員もおられるように聞き、心強く思っている次第です。将来を見据えた、“安全”で“快適”な都市環境を形成すべく、しっかりしたグランドデザインの下に復興計画を立案されることを期待します。

私は、科学技術を過信せず、自然現象に対して奢らず侮らず、もっとソフトに対置できる都市環境の形成が必要のように感じています。是非、頑張っていて、早い時期に元気な姿を見せてくれることを期待し、お待ちしております。

中部ブロック 玉木伸秀

兵庫県南部地域を震源とする地震の被害状況が絶え間なくニュースで報道されていますが、その広範かつ甚大な被害の有様に大変驚いております。

JUDI会員の皆様の中にも、被害を受けられた方がいらっしゃるのではと案じております。その後の情報により、被害にあったにもかかわらず苦難を乗り越えられている様子を拝見いたしました。皆様、復興に向けて仕事に家庭にと頑張っておられることと存じます。

私どもも、神戸の仕事で行ったまちづくり事業がここで中断されてしまうのではと憂慮しておりましたが、被災された地元の方々の熱意により、「神戸らしいまちづくりの心の灯を消さないでほしい」と、市民・行政の方々が復興に向け、力を

合わせて立ち上がっているという報を頂き、胸が熱くなる思いでした。会員の方々におかれましても、美しい神戸が戻ってくることを願って復興に取り組まれていることと思います。どうかお力を落とされことなく、一刻も早く平常活動ができますことを心よりお祈りいたします。

関東ブロック幹事 横川昇二

■輪を広げる機会として

阪神大震災は震源地やその規模の上でも誰も予想できないものであった。震災後は報道機関や専門家により、ソフト面、ハード面から多くの課題が投げかけられ議論されている。

しかし、その中で地震国日本としては「形ある物は壊れる」という基本的なものの考え方を見逃しているように思われる。現状を踏まえると不謹慎と思われる考えだが、様々な基準や制度は多くの経験と時代を経て変わってきたし、まちづくりの中でこのような自然災害をどの程度配慮していたかは疑問である。

この震災によって失われた尊い人命とともに、美しい街、魅力ある街、にぎわいのある街の代表である神戸は多くのものを失うと同時に多くのものを学んだように思われる。

今は、亡くなられた方々の死を無駄にしない為にも、時間をかけ、知恵をしばり、新たな街づくりを行うことが残されたものの使命であり、震災復興という観点から目先の一時的な解決を求める対策だけでなく、長期的な展望に立った根本的な計画を策定する為にも、1つは、都市環境デザインにおいては「ハードのデザイン」と「ソフトのデザイン」が必要であり、「見えるデザイン」だけでなく「見えないデザイン」を行うことが重要であること。また、共生の為に土地や空間利用の合理性や効率化を図る観点から、余白の意味や空地化を大切にすること、観点を転換する必要があること。

さらに、計画や制度、管理の限界を知り、その速度を減速することや容量や密度の飽和点を知ること、あるいは自然環境や現象などを謙虚に受けとめ、共生する最小限の作法を持つことなどを心掛け、JUDIの会員の方々と協力関係の輪を広げたいものである。

関東ブロック幹事 伊藤洋

いずれどこかで、たぶん関東に起こると恐れていた大震災が、たまたまほとんど予想せず、備えの少ない阪神を見舞ったことに驚いています。衷心よりお見舞い申し上げます。

すぐにとんで行くことがかえって間違えなく迷惑となると予想され、自分にそんな迷惑をかけることなしに果たせる余力のほとんどないことが残念です。

考えてみて、再開発などを含めた復興の方法と、被害を受けられた家族ごとの生活再建と、都市の構造から被災者の方の心の問題まで、たくさんの方

課題があります。

さらに、いろいろな人が復興の様々な場面に参加することで、個性的な神戸の街の佇まいが今後どうなるかも気になります。

ひとつひとつ回答を見つけ、合意を図り、組み立てていくことには、高いハードルもあります。当たり前のことですが果敢に手を携えて考え実行することだと思います。

関西の方々が、私ども関東のもの達よりも心がナイーブであるという認識があるとともに、同時「遅い」という思いがあります。頑張る必要は必ずしもないと思います。今の状況に居直って行動されることを希望します。他の地方に憂いているものがあることをご記憶下さい。手を携えたいと思うものがあることをご記憶下さい。

(株)日本都市総合研究所 加藤源

街づくりに際して、美、伝統、エコロジー、コミュニティ等の語句がキー・ワードとして語られるようになる等、街づくり、都市計画のパラダイム・シフトが一貫して進捗しつつある。

しかしながら、今回の阪神大震災は防災や安全性等を第一に据えた都市計画への関心を高めさせ、これまでのパラダイム・シフトを何年も前の時代の都市計画へと戻らせることになるのではと危惧している。復興計画の策定に際して、いわく「関東大震災の時は」、「震災復興のときは」、……等である。

今回の大震災は、こうした過去の震災、戦災とは異なって今日起きたものである。過去の震災時にも今日に通ずる思想、理念を持ってなされた復興事業も数多くあるが、今回の震災復興に際しては、今の時代にふさわしい、すなわちこれまでのパラダイム・シフトを充分に踏まえて、計画づくり、事業が進められることを期待したい。

今の時代、これからの時代は、関東大震災や戦災時とは全く異なった社会、人々の考え方を背負っているのである。

中国ブロック幹事 金谷啓紀

JUDI 阪神ブロック被災者の皆様へ

阪神大震災により、被害を被った阪神ブロックの会員の方に対しこころよりお見舞い申し上げます。活や交通が不便だと察します。また、仕事にも影響がでていると思いますが、どうかこの災害に動じないで頑張ってください。

神戸、西宮、芦屋は日本の中では一度は住んでみたいところとしてあこがれの都市でしたが、この度の地震で悲惨な姿に変わってしまい、残念ではありません。

復興には時間がかかりそうですが、単に防災都市としてではなく、以前の阪神地域以上のすてきな都市、日本一都市環境デザインを考えたモデル都市として蘇るように頑張ってもらいたいです。これからみなさんの出番です。私たちも応援します。

四国ブロック幹事 林茂樹

大きい苦難に対し、なぐさめの言葉もありません。これからの新しいまちづくりに力を尽くしてください。

HIKO MITANI

1995年1月17日早朝に起った兵庫南部大震災のすぐ後、18日から26日まで日本に仕事で出かけ、東京・名古屋で予定の打ち合せ会議等をする機会があった。

その間、絶える事の無い新聞・テレビ・ラジオ等の報道を見聞きして考えた事、又サンフランシスコに帰りシアトルのKOICHI KOBAYASHI氏やロスアンジェルス TAKEO UESUGI氏と共に、現在進めようとしているボランティア作業に関して、私見を述べさせていただきたく思う。

多くの方々が亡くなられたこの震災は、地震そのものは天災であるがその後の被害の大きさおよび混乱は、人災以外の何ものでもないのではない。又、被害を大きくし、大きな混乱をまねく様な、インフラも含めての街作りに、役所に対して大きく力を貸した我々アーバン・デザインに関わる職業にたずさわる者は、その責を感じるべきであると思う。

戦後このかた神戸のウォーターフロント開発や公共空間デザインにかかわった方々も、JUDIのメンバーの中には多数おいでになると思うし、又、私自身も兵庫県の播磨科学公園都市のプロジェクトに関わらせていただいたが、我々の考えていた街作り（アーバン・デザイン）の視点に、何か大きく欠けているものが有ったのではないのか？表面的な見え方や、微細なおさまり、あるいは又観念的なコンセプトやビック・ピクチャーを追い求めすぎたのではないのか？我々に共通して欠落していたものは何なのか？そういった反省をアーバン・デザインに関わる者の一人として、強く感じた次第である。その反省こそは、神戸の復興に対して我々が出来る、先ず第一歩となることを認識したい。

現在、私どもサンフランシスコのピーター・ウォーカー事務所では私をはじめKEN KAWAI氏、バークレーのランドスケープ学科の学生であるWEI-CHING氏、が中心となって「地震と都市計画」に関するサンフランシスコ市によるスタディやその他コンサルタントによる答申の文献を掘り起こそうとしている。御存知の様にサンフランシスコでは1989年に大地震があったし、USAの政府も1970年代に国費をかけて「地震とその被害を最小限に食い止めるスタディー」をかなりの規模で行ったようである。

1970年代に何が提案されたのか？その結果どういう変化があったのか、あるいは無かったのか？そして年々89年のサンフランシスコ地震の後に、又何が提案され、現在どういう状況なのかを、同じ地震多発地帯パシフィック・リムのサン

フランシスコに住む人間として、リサーチを始めている。

集まった資料に関しては、有効と思われる組織には官民・ボランティア団体を問わず、もちろん無償で提供するつもりでいる。JUDIメンバー達の考え、および行動派いかなるものか？御意見なり、御助言があればFAX(0011-510-849-9333 C/OPWWJ)NITE、どんどん後通信願えればと思う。

アーバン・ハウス都市建築研究所 倉田直道 阪神大震災の教訓

たまたまその地に居住していたというだけで今回の震災に遭った人々の不幸に対して、少しでも早い復旧・復興を祈らずにはいられない。

今回の震災は、これからの都市計画、まちづくりに対して多くの教訓を与えてくれた。まず国家に始まる一元化された集中的な大きなシステムというものが震災においては十分に機能しないということである。復興整備にあたっては、インフラのネットワークをはじめとする都市のフィジカルなシステムと行政などの社会のシステムを、より日常生活圏に近いコミュニティ単位で分節化する必要があるだろう。特に、復興計画の中では、防災都市を整備するために街区や道路、公園等の配置の見直しも必要となるだろうが、その答えが大きなシステム、スーパーブロック、車のための道路づくりへと向かわないことを期待している。改めていう必要もないかもしれないが、生活者の視点に立脚した都市づくりを忘れないで欲しい。

もう一つの大きな教訓は、高度な技術に対する神話が崩れたことである。当然、今回の地震の結果をもとに土木、建築の耐震技術の基準が見直されることになるだろうし、それは必要なことである。しかしその一方で技術基準を強化することで単に頑強な都市をつくればよいという都市づくりの姿勢に対しても反省が必要ではないだろうか。地震を地球という大きな自然の営みの一つと考えるならば、これを技術の力だけでねじ伏せていくのではなく、大きな自然の営みとも共生していく姿勢が必要である。情緒的な反応かもしれないが、都市を支える技術のみのよって対処していく限り、これはある種のイタチごっこであり、絶対という答えは永遠にないだろう。さらに高度な技術の進歩やその結果である巨大な都市のインフラのシステムへの依存が大きくなればなるほど、震災の被害も大きくなっていくような不安すら感じる。今回の震災後の被災者の生活をマスコミを通じてみるとこれまでのコミュニティの人間関係や古くからの生活の知恵というものが役に立っていることを実感する。これはまさに生活のなかにある極めてローテクな適正技術といってよいものであり、こうしたものを再評価し、それを近代的な都市のシステムを補完するものとして都市計画やまちづくりの中に位置づけることも必要であろう。サンフランシスコでは、1989年の地震の後、

地震によって大きな修復が必要となった湾岸を走る高速道路を地震を機に撤去し、路面電車と歩行者が共存するプロムナードづくりをすることを市民自らが選択した。

もう一つ阪神大震災の復興計画において、忘れて欲しいことがある。神戸はこれまで我が国の都市デザインへの取り組みの一つのモデルであった。震災復興計画では防災都市としての都市基盤の整備に多くのエネルギーが投入されるだろう。震災復興計画を進める中で、新たな都市デザインやまちづくりへの取り組みのモデルが示されることを期待したい。

大阪産業大学工学部環境デザイン学科 代表幹事 榊原和彦

都市インフラストラクチャーの復興に関するデザイン論的課題を中心として

まず、被災地の住民ならびに会員の方々に衷心からのお見舞いを申し上げます。

「阪神大震災後」は、後代において「関東大震災後」「戦災復興期」と並び称される都市計画、都市づくり上のエポックとなろう。このタームが、否定的な意味で使われるか肯定的な意味で用いられるかは、今後の復興の成果に依存する。復興への動きが少しずつ伝わってくるこの頃、兵庫県、神戸市をはじめとする各都府県、市長の行政当局者、計画者・デザイナー、住民の方々には、極めて厳しい状況であることはお察しするが、後世に讃えられる復興を成し遂げていただければと考える。戦災都市復興では、その成否に各都市間で大きな差があった。それは、結局のところ各都市の行政と市民の意志と努力の差の結果であったと言える。都市づくりは、基本的に、そのように「自決的」なものであり、そうあるべきであろうと思う。各都市が自ら成す新たな都市づくりを自制的かつ暖かく見守りたい。もちろん、できることがあればご協力することにやぶさかではない。

今回の震災での都市インフラストラクチャーへのダメージは無惨なままであった。これを中心とする復興計画に関連して、(i)幹線街路復興整備のあり方、(ii)高速道路のあり方：新幹線・ネットワーク、地下化などを含む、(iii)新街路・新都市軸（パークウェイ）の建設：東西軸パークウェイ（六甲山背後道路、平常は観光レクリエーション用・一般産業交通禁止、非常時に幹線道路の役割を果たすアメリカのナショナル・パークウェイなどを参考に）、南北軸都市内パークウェイ（東西軸の連絡、防火帯、緑地の役割）、(iv)準幹線・生活街路復興整備のあり方：安全な生活、被災時道路機能の確保などをめざして、(v)ライフラインの構造化整備・柔構造のあり方：共同溝化による地下通路+ラインの二重構造化、機能区分による段階的構成、整備優先順位・整備レベルの設定、(vi)生活者の視点からの都市インフラ（生活基盤、末端インフラ）の整備のあり方、(vii)震災もメモリアル化と併せた都市インフラ整備：関東

大震災の埋め立てで生まれた横浜・山下公園などを参考に、など思いっただけでも検討すべき課題は多い。

ここで、インフラストラクチャー・デザインを興味の対象とするものとして思うところを述べておきたい。ある高名な地震学者が次のような談を呈する。『現代の都市計画は、安全よりも快適さを全面に出している。橋脚も、用地の事情やデザイン面で一本になることが多い。要するに、安全よりカッコ良さを求めているんです』（FOCUS、2月1日号、1995、pp.36～37、『なぜ日本の高速道路は安全といわれていたかー打ち砕かれた「神話」』）。この言明の、地震工学者としての無責任さはさておきとして、『安全よりカッコ良さを求めているんです』から、どういう結論が引き出されるのだろうか。『だから丈夫でありさえすればよい』『復旧にはただでさえ多額の費用がいるんだからカッコ良さ（デザインや景観）など構ってはいられない』という風潮になるとすれば困ったことである。京都大学佐和隆光教授の警句も見逃せない。『日本は都市も産業も消費者も効率一辺倒だった。一方で今度のような災害になるとワッと安全性に走ってしまう。目標の立て方が一元的で、二律背反する考え方をうまく調整することに慣れていない』（朝日新聞、2月8日朝刊、p.11、『立ち上がれ阪神経済②』）。安全や防災のみが問題とされるという危惧は消えない。一方で、作家高村薫の市民としての力強い声がある。『…この震災を機に、日本一美しく丈夫な街に建設し直そうという希望がある。…』（京都新聞、1月24日夕刊、『喪失感超え、美しい街再生を』）。ただ復旧し、復興することは、誰も望むところではないであろう。阪神大震災は都市づくりの重要な課題が「アメニティ」「景観美」「福祉のまちづくり」「グランドデザインにもとづくまちづくり」などである時代に起きたのである。戦後復興期から高度成長まで、復興必要量の膨大さと緊急度の高さから、「安く」「早く」「大量に」都市インフラを整備した時代とは異なる。都市質、景観性、快適性の問題を見過ごしてはならない。また、「柔構造のデザイン」（フレキシブルで、災害や変化・更新に対し、許容性、対処の余裕・余地をもつようなデザイン）を考えなければならない。早期に大量の建設が望まれる今こそ、永続的に存在し、市民に親しまれる都市インフラのあり方（整備水準、デザイン水準）を検討し、合意形成にこぎつける必要があろう。震災後、都市美・土木美のパラダイムが変わることがあり得ても、その価値自体が忘れ去られるようになってはならない。震災をくぐり抜けたことの意味が形に表れた、質実で、力強く、頼りがいのあることを実感させるような「都市土木の意匠」を模索し、実現への方策を探ることが必要ではないか。このために、たとえば、「新構造基準に適合したインフラ復興におけるデザインのあり方・指針の検討」や緊急の復旧と本格的復興を区別して2段階で行

う「復興方式のあり方の検討」が必要であろう。

窪田陽一

震災復興への覚え書き

津波災害を伴った北海道南西沖地震や、三陸はるか沖地震など、最近地震が多いと感じていた矢先に、都市直下型の兵庫県南部地震による大震災が発生した。建造物が倒壊して下敷きになりあるいは火災により命を奪われた人々の無念さと思うと胸が痛む。心より御冥福をお祈り申し上げたい。

未だ多くの被災者が不自由な避難生活を送っている状況下で、遠隔地に住み平穏な日々を過ごしている者が軽々しく多言を弄すべきではないと思うが、復興という急速な事態の展開の中で往々にして見過ごされたり後回しにされがちな事柄のいくつかについて、備忘録として心有的人々の注意を喚起しておくことにする。

その第一点は「都市のゆとり」という問題である。ゆとりという言葉の曖昧さが好ましくなければシステム工学の用語で冗長性と言ってもよい。英語ではリダンダンシー(redundancy)という。あえて「有効な過剰」あるいは「有効余剰」と言ってもよいだろう。ゆとりという言葉が「経済的ゆとり」「空間的ゆとり」「時間的ゆとり」と何らかの形容を伴うことが多いように、都市におけるゆとりも同様に考えてよい。

建造物の耐震性能を向上させるためには経済的余裕が必要である。復興資金の財源が取りざたされているが、応急的に再建されたものばかりで今後長期にわたって存続していく都市空間を埋め尽くすわけにはいかない。非常事態に備えるとは言っても何も起きない平常時には他の価値観、快適さや魅力といった精神性を求める観点が必ず表に出てくる。その時になって表層を飾りたてるようなお化粧を施しても、本物の良い街にはならない。そのようなぶざまな事例は他にいくらかもある。景観行政では先進都市の一つであった神戸の誇りを失わないでもらいたい。そのための投資は必ず回収できるはずである。もう一度作り直す機会はないと念じて相応の初期投資はすべきだろう。

オープンスペース、つまり都市空間のゆとりの確保も大きな課題である。関東大震災では学校と公園を隣り合わせに整備することにより延焼防止を兼ねた避難空間の計画的配置を行っている。橋詰も同様である。元はと言えば江戸の火除け地にその原形がある。広幅員の街路空間も延焼防止や避難通路と機能するだけでなく景観の向上にもつながる。本来、景観とはあらゆる機能の全体的統

合の結果として造形されるべきものなのである。建造物の補強もデザイン・モチーフの一つとしてとらえる技量が問われる時代なのではなかろうか。

避難所に指定された公共施設の非常時への対応性能も高めておかねばならない。学校を学校としてのみ計画し設計するのでは非常時に不自由が大きすぎる。いわば機能の多重化を考慮した施設の計画設計が必要なのである。このような方法論は、目的対応型の機能純化を前提とした単純な発想では構築できない。これを可能とするシステムと投資が不可欠である。そしてそれらの避難空間は平常時から人々の憩いの場として親しまれるような場所であるべきだろう。そのような日常的な接触を通じて非常時の適切な避難行動や施設利用が可能となるのではないか。

今回の地震で歴史的文化財もかなりの被害があったようである。開港場として都市の履歴が始まった旧居留地地区や山手の異人館地区はまさしく近代神戸の原点であり、その顔となっている近代建築が全て消滅したとき神戸のアイデンティティはほぼ完全に喪失するだろう。これらの地区の復興においては、少なくとも建物の外観復元を条件にしておかないと、たとえ耐震性の高い現代建築が建ち並んだとしてもかつての魅力に比肩する街ができるという保証はない。

この震災で浮き彫りにされたことの一つに、古い建物の耐震性の強化をどうするかという問題がある。消防法によれば、防火性能に問題がある建物にたいしては改善命令が出される。適及が認められている法律なのである。民間建築の耐震性能の向上に関してこのような発想がなかったのは、補強工事の経済的負担の問題と、事実上の建物解体につながる恐れがあったからだろう。そうならないようにするためには、なんらかの技術的・経済的援助が不可欠である。

これだけ危険があふれている国土の中で、世界的に見ても異常に地価が高いこと自体がナンセンスに他ならず、それ故に耐震性能向上への投資が制約されているとすれば、これほど自虐的な社会はない。土木・建築の技術的問題を指弾する前に無意味な過剰を削減することから始めなければなるまい。頭上から降ってくる看板や、折損して避難路をふさぐ電柱も、景観阻害要因というより災害要因という側面を問題にすべきなのではなかっただろうか。

神戸およびその周辺被災地が、こうした現代都市の矛盾を先進的に解決していくモデル都市になってほしいと願わずにはいられない。

JUDI NEWS 21号の訂正

青木成美氏の記事の本文中(2頁右段上から6行目)「…図で示したcの誘導用ブロックが…」は「…図で示したdの誘導用ブロックが…」の誤りです。お詫びいたします。

広報・出版委員会

編集後記

●本号は偶数月発行を奇数月発行に直すための過渡的な号です。全国ブロック幹事会のニュースだけの予定でしたが、阪神・淡路大震災が発生し、とりあえず、全国ブロック幹事会有志によるメッセージを掲載しました。以降の号でもとりあげていきたいと思っています。[土田]

JUDI ニュース編集委員会

土田 旭	櫻井 淳
沢木 俊岡	菅 孝能
中嶋 猛夫	作山 康
小林 郁雄	清水 泰博
宮前 保子	折田 知子
伊藤 光造	松村みち子